

別紙解答用紙に解答すること。

問 次の三つの意見を読み、ポストコロナ社会（現在のコロナ禍のあとに訪れると考えられている、感染症の存在を前提した新しい生活様式を持つ社会）におけるスポーツのありかたについて、考えるところを 600～800 字で述べなさい。

【意見①】

新型コロナウイルスの感染拡大リスクを下げるため、日本を含む世界各地で対戦型ゲームで競う「eスポーツ」がにわかに活性化しています。

人々が「密」を避けるようになれば、スポーツの観戦法や楽しみ方も変わらざるを得ません。例えば、500 インチモニターでの高精細映像では、見る者の視野が100度覆われ、試合を間近で見ているような体験ができます。

リアルなスポーツとバーチャルの融合も進みそうです。100メートル走や走り高跳びの金メダリストを小学校のグラウンドにホログラムで登場させて、子どもたちと一緒に走ったり跳んだりするようなことも可能です。

たとえば、目や口を動かすだけで競い合えるスポーツを作れば、寝たきりの難病患者も参加できます。科学技術で社会にある壁を取り払っていけば、将来のスポーツの祭典では子どもも高齢者も、女性も男性も、障害者も健常者も一緒に競い合うようになるのではないのでしょうか。いずれは五輪とパラリンピックも融合していくかもしれません。

いくらバーチャルな技術が発達しても、選手と観客がリアルな「スポーツの場」を共有する満足感は得られない、という声もあるでしょう。

でも、バーチャルではリアルにない感動や価値を生み出すことができるはずです。コロナ時代のスポーツは新たな楽しみやビジネスを生む可能性を秘めています。

【意見②】

ウィズ・コロナの「新しい生活様式」という発想がスポーツ界にも広がっています。従来のリアルなスポーツをデジタル技術を使い、「密」も「集」もない新たな「非接触型」のスタイルへ変えようという考え方です。

この言わば「新しいスポーツ様式」は補完的措置としては成立するかもしれませんが、でも、スポーツイベントそのものを大きく変容させるのはやはり無理だと思えます。

それは、スポーツの本質が「密」と「集」にあるからです。「移動」と「交流」を繰り返しながら進化し、社会をつくってきた人類の本質とも深く関係しています。

社会を変えたいと考える人々はデモに集い、つながろうとする。「密集」は人間の本能なのだと思います。そうした原理に基づくから、スポーツ文化はここまで発展を遂げたのではないのでしょうか。

いまコロナ禍で、スポーツは「不要不急産業」の代表のように扱われています。イベントの参加人数に上限を定める措置もまだ続いています。支えとなる大企業がないクラブやチームは自分たちに何の責任もない疫病のせいで、倒産しかねない状況に追い込まれています。

コロナの「隔離と拡散」の時代が過ぎれば、人々は必ず「密集」に戻るでしょう。その時、焼け野原になっていることのないよう、国はスポーツ産業にも支援の手を差し伸べるべきです。

【意見③】

霊長類はその多くが群れをつくって生きる動物です。なかでも人間は見知らぬ他者といること寛容で、村や会社、国家など重なり合う複数の集団の中で生きることができる唯一の種です。集まって、他者とともに何かを同調して行うことは、人間にとって根源的といえます。

1万3千年ほど前に定住を始めた人類は、約5500年前には都市文明をつくります。こうした歴史の中で、集団で行うスポーツのような遊戯が生まれたのでしょう。古代エジプトの壁画には、複数の人間が踊っている様子が描かれています。他の霊長類でも、取っ組み合いや追いかけてこといったルールつきの「遊び」は見られます。しかし、多数が参加して役割を分担する「団体戦」を楽しめるのは人間だけです。

そんな人類固有の遊戯であるスポーツが今、揺らいでいます。ウイルス感染リスクを避けるため、無観客になり、オンライン観戦という手法も導入されましたが、これでは共感や一体感は得にくい。私たちは十分な距離を取り、歓声をあげないなどの厳しい条件がついたとしても、「今・この場」に集まってリアルなつながりを感じたいのではないのでしょうか。スポーツの祭典、五輪はそんな集まりの象徴といえます。

千人以上が集まるイベントが生まれたのは都市文明の誕生後だと考えれば、実はごく最近です。コロナ禍でそれをどんなものにするのかは私たち次第です。時には戦争で殺し合う私たちが、国境を越え、多様な人々が集まり、関わり、認め合う。五輪を全人類が地球上に共存していることを感じ取る場にできれば、人類にとって意味あるものになるのかもしれませんが。

『朝日新聞』2020年9月9日（一部省略）

以上